ラオ人の帰属意識

山下明博
広島大学大学院国際協力研究科　大学院生
〒739-8529 東広島市鏡山1-5-1
E-mail: yamasita@yasuda-u.ac.jp

１．はじめに

東南アジア大陸部に位置する，タイ王国（Kingdom of Thailand, 以下，タイと略す）とラオス人民民主共和国（Lao People's Democratic Republic, 以下，ラオスと略す）には，ラオ人（Lao）という民族が居住している．ラオスのルアンプラバーン（Luang Prabang）を中心に栄えたラーンサーン王国（Kingdom of Lan Xang）の末裔であるラオ人は，もともとメコン河の両岸に居住していたが，東南アジアにインドシナ植民地を建設したフランスが1893年にメコン河に設定した国境によって居住地を2つに分断され，現在に至っている．便宜上，西岸に居住するラオ人を「タイのラオ人」，東岸に居住するラオ人を「ラオスのラオ人」と呼ぶことにする．図１に，ラオ人の分布を示す．

ところで，人口約474万人(1)のラオスにおいては，ラオスのラオ人が支配的集団である．他方，人口約5910万人(2)のタイにおいては，シャム人（Siam）が支配的集団であり，タイのラオ人は被支配者の状況にある．

Moerman（1965: 1215–1230）はかつて，東南アジアに分布するルー人（Lue）という民族が，タイという国家の中で，他者との相互関係や社会的文脈に応じて，その呼称をルー人，タイ人（Thai），コンムアン（Khon Müang）と使い分けていることを指摘した．これと同様に，タイのラオ人も，国家の中で，ラオ人，タイ人，イサン(3)人（Isan）といった複数の呼称を使い分けている．ただし，タイのラオ人の場合，事情はさらに複雑であり，単純に複数の呼称を使い分けているわけではない．ラオという呼称を禁止したり，ラオ人の母語であるラオ語をラオ文字で記述することを禁止するといったタイ政府の政策が，ラオ人の帰属意識に大きな影響を与えているのではないかと考えられる．

逆に，ラオスの支配的集団であるラオ人の場合は，全国民にラオという呼称を使用させ，ラオ語による教育を行い，ラオ文字を国字にするという政策を実施している．この場合は，ラオ人への帰属意識を，国家が強化する方向にあるといえる．

このように，ラオスとタイという，規模も体制も異なる2つの国家の中で，異なる地位に置かれたラオ人は，国家の政策が，民族への帰属意識に与える影響を考える上で，格好の研究対象であるということができる．

これまで，タイのラオ人や，ラオスのラオ人の帰属意識に関しては，多くの先行研究が行われてきた(Keyes 1966, Brown 1994, Jumsai 1971)．本稿は，それらの研究をふまえ，タイとラオスという異なる国家体制に布置されたラオ人という民族の帰属意識に，国家の言語政策が何らかの影響を及ぼしているか否かという命題を，タイのラオ人を対象に実施した，言語の表記体系と認識に関する現地調査の結果等をもとに考察するものである．

まず，議論の前提として，タイの民族構成およびラオ人に対するタイ政府の政策を概観する．次に，多民族国家における支配言語・従属言語の関係および国家による表記体系の強制について論じる．その後，今回実施した言語認識調査の必要性，その概要，調査結果，被験者の反応，調査に関す

広島大学大学院国際協力研究科『国際協力研究誌』第６巻第１号，2000年，pp. 307–315

る考察等を述べ，最後に結論を導く．

２．タイ政府とタイのラオ人

（1）タイの民族構成

タイの国民は，シャム人をはじめとして，ラオ人，ユアン人といったタイ系民族や，クメール人，モン人などの少数民族，カレン人，メオ人といった山岳少数民族，そして，早くからタイ社会への融合を進め，政治的・経済的にも重要な地位を占める(4)華人から構成される．

タイがメコン河東岸をフランスに割譲して以来，タイ国内で，国民の民族構成を知るための調査が組織的に実施されたことはない．それは，タイ国民は，民族の出自，宗教を問わない「タイ人」から構成されているという考え方からである（山下1999a: 75–76）．西欧諸国が，タイ以外の東南アジアを植民地化した時期には，タイという国家が，国外から，タイ人という単一民族の国家であるように見えることが，国家の独立維持に重要な意味を持っていた．

Smalley（1994: 369）は，タイ国民の母語人口を推定している．それによると，ラオ人は全人口の23%であるのに対し，シャム人は，全人口の27%を占めることがわかる．

（2）タイ政府の政策とラオ人の帰属意識

1893年に，フランスがタイにメコン河東岸の割譲を迫り，現在のラオスに相当する地域をインドシナ植民地へ併合したことにより，メコン河の両岸に居住していたラオ人が，２つの国家に分断されることになったのはすでに述べた通りである．そして，その後，タイ政府は，タイのラオ人とラオスのラオ人の分断をはかり，タイのラオ人をタイ国民化する政策を打ち出していった．

タイ政府は，まず，それまで往来が自由であったタイとラオスの国境をきびしく管理した．そして，タイのラオ人とラオスのラオ人を容易に区別できるように，タイのラオ人の女性の髪型や服装などを定めるなどした（長谷川1981: 110）．

次に，19世紀末に，タイ政府は，タイの東北部に居住していたラオ人に対して，ラオという呼称を使うことを法律で禁止し（林1998: 88），その代わりに，イサンという呼称を使用させるという政策を実施した．この結果，タイ国内において，ラオ人という呼称はイサン人に置換され，ラオ人の母語であるラオ語の呼称もイサン語に変更された．同時に，ラオという呼称のついた地名から，ラオという呼称が排除された．それまで，東北タイには，ファムアング・ラオ・プアンやファムアング・ラオ・ガオといった，ラオという言葉を含む地方名が存在したが，1900年，これらの地域名は，モントン・ウドンやモントン・イサーンに変更された（福井 1988: 53）．

タイ政府は，1930年代には，ラッタニヨム第３号で，タイ人の新しい定義として，ラオ人であろうとムスリムであろうとタイ国内に住んでいる者をタイ人と呼ぶことにした．これは，国民国家として「国」と「民」を合一させる国名に「タイ」を選び，「国民」として，民族の出自，宗教を問わない「タイ人」という呼称に統一させたことを意味する（吉川1996: 11）．

このような政策に加え，タイ文字以外の書物の出版を禁止するといった政策により，東北タイに住むタイのラオ人の帰属意識に変化が生じたのではないかと考えられる．

３．国家と言語

（1）多民族国家における支配言語・従属言語

タイもラオスも多民族国家であり，かつ，多言語国家である．このような国家においては，複数の言語のうち，いずれかが，共通語という特権的な地位を獲得する．そのような言語を，支配言語と呼ぶことにする．そして，支配言語以外の言語は，支配言語に対し，従属的な地位に置かれることになる．そこで，これらの言語を，従属言語と呼ぶことにする．

多言語国家においては，共通語の地位を得ることができるか否か，すなわち，支配言語になれるか否かが，その言語を使用する言語集団の生存機会を多分に規定するということができる．

また，これに加え，支配言語と従属言語との間に，言語の連続体というべき関係，あるいはきわめて近縁の関係が成立する場合，従属言語が，支配言語の方言であるという認識を，支配言語の話

者が強制することがある．例えば，言語Ａと言語Ｂが，言語の連続体である場合，あるいはきわめて近縁の関係にある場合，言語Ｂは，恣意的に言語Ａの方言とみなすことができるし，それとは全く逆に，言語Ａを，言語Ｂの方言とみなすこともできる．どちらの言語を方言と呼ぶかは，どちらの言語が支配言語の地位を獲得するか，従属言語の地位に置かれることになるかということで決定される．

この関係を，タイとラオスにおけるシャム語とラオ語の関係に当てはめることができる．タイにおいては，シャム語をもとにした標準タイ語が共通語，すなわち，タイの国語の地位を獲得した．その結果，ラオ語は，タイにおいては，標準タイ語の方言であるとされ，「ラオ」という呼称をシャム人によって禁止され，その代わりに，民族名を想起させないイサン語という呼称に変更された．シャム語は支配言語，ラオ語は従属言語という地位が定まったのである．その結果，東北タイのラオ人の中では，ラオ語あるいはイサン語と，標準タイ語のダイグロシア[5]の状況が一般的になってきている．

他方，ラオスにおいては，ラオ語が共通語，すなわち，ラオスの国語の地位を獲得した．ラオス人民民主共和国憲法第75条において，ラオス語は，公式に使用される国語であると明記されている（青山 1995: 226）．

（２）表記体系の強制

タイにおいて，支配言語の地位を獲得した標準タイ語を表記するために使用されているのが，タイ文字と呼ばれる表記体系である．また，ラオスにおいて，支配言語の地位を獲得したラオ語を表記するために使用されているのが，ラオ文字と呼ばれる表記体系である．

ここで，タイ文字とラオ文字との関係を明らかにする．タイ諸語に属するシャム語とラオ語を記述する文字は，バンコクの国立博物館に保存されている「ラームカムヘーン（Ramkamhaeng）王碑」に刻まれた文字がその起源とされ，これがタイ系民族の残した最古の文字であるとされている．碑文には，その文字の考案者もラームカムヘーン王であると刻まれており，クメール（Khmer）文字を基に創作したその文字の書体は，ラーイスータイと呼ばれている．もちろん，この文字は現在の書体とはかなり異なったものである（赤木1989: 67–68）．そして，シャム人は，そこにサンスクリット系の文字を取り入れ，44の子音文字から構成される現代タイ文字へと発展させてきた．他方，現代ラオ文字も，ラームカムヘーン王の考案したラーイスータイを発展させてできたものである．現代ラオ文字は，33の子音文字から構成され，その起源は現代タイ文字と同じと考えられている．

現在のタイにおいては，タイ語を記述するためのタイ文字が，唯一の表示体系として使用されている（山下1999b: 335）．それは，従属言語の表記体系を，強制的にタイ文字にする政策が採られたからである．新聞，書籍，テレビといったマスメディアも，このタイ文字を使用している．政府がこの方針を堅持しているのは，他の表記法を認めることが，タイの統一にとって障害になるのではないかと恐れているからである（李1997: 41–42）．当然，山岳少数民族の言語なども，タイ文字で記述することが推奨されている．少数民族の言語のローマ字による出版については，タイ政府は，規制を行うと発言しているほどである（李1997: 14）．

このため，タイにおいて，ラオ語は，ラオ文字ではなくタイ文字で表記され，出版物が作成されている．ラオ語の文書をラオ文字ではなく，タイ文字で出版した例として，「タイ語－イサン語－英語辞書」が存在する（ปลีชา（プリーチャ）1989）．

次に，ラオスにおいては，ラオ語を記述するためのラオ文字が，唯一の文字体系として使用されている．ラオス人民民主共和国憲法第75条において，ラオ文字は，公式に使用される国字であると明記されている．

そして，従属言語の表記体系を，強制的にラオ文字にする政策が実施された．現在でも，少数民族の言語の表記をラオ文字にすべきであるという方針が存在する．

もともとは同じ言語であっても，異なる表記体系を採用することによって，異なる言語に分化していった例としては，デヴァナガリ（Devanagari）文字で書かれるヒンディー語（Hindi）と，アラ

ビア（Perso-Arabic）文字で書かれるウルドゥー語（Urdu）が，別の言語へと分化していった過程が有名である（Campbell 1991: 1425）．異なる表記体系が，異なる言語であるという認識を強化するのに，重要な役割を果たしているといえる．

４．タイのラオ人に対する言語認識調査

（1）言語認識調査の必要性

タイのラオ人が，自らの母語であるラオ語を記述するときに，タイ国内において，ラオ文字を使うことができないことは既に述べた通りである．ここでは，そのことが，タイのラオ人の言語認識にどのような影響を与えているかについて明らかにする．

林（1990: 409）によると，タイのラオ人の村人を世代で分けて考えた場合，30代の村人はほぼタイ語とイサン語の二言語使用能力をもっている．50代のラオ人でもタイ語新聞を読むことだけはできる．標準タイ語教育を受け始めた，さらに高齢の第1世代は，タイ語は理解しても読み書きはできない．逆にラオ語はラオ文字で読み書きできるという．

東北タイにおける言語の使用状況を論ずるためには，言語の認識に関する具体的な調査が必要である．これまで，Brown（1995: 142–145）により，古タイ諸語から現代方言への変遷を調べる調査が実施され，東北タイの言語の系統図が作成されている．しかし，ラオ人が，タイ文字，ラオ文字によって表記された文章に対して，どのような言語認識を行っているかについては，現在までのところ調査が行われてこなかった．

（2）言語認識調査の概要

そこで，今回，タイのラオ人を対象に，言語と表記体系に関する調査を実施した．内容は，ラオ語を母語としながら，ラオ文字でなくタイ文字で教育を受けているラオ人の学生に対し，タイ文字やラオ文字で表記した文章を，タイ語，イサン語，ラオ語(6)のうちどの言語と認識するかを問うものである．

調査地点は，東北タイのコーンケン（Khon Kaen）に位置するコーンケン大学，およびナコンラチャシマ（Nakhon Ratchasima）に位置するラッチャーモーンコーン工科大学コラートキャンパスを選定した．ここには，東北タイを中心に，広範囲の地域から学生が集まっている．その中の438名を対象に，言語と表記体系に関するアンケートを実施した．さらに，その中で，父母のいずれかがイサン語またはラオ語を母語とする学生236名を抽出しその結果をまとめた．

質問票はタイ語で作成した．そして，タイ文字あるいはラオ文字で記述された文章を被験者に見せ，その文章が，タイ語，イサン語，ラオ語で記述されていると被験者が認識するか，しないかといった質問を中心に，計32項目の質問を行った(7)．

ただし，この調査の対象は学生であり，その意味では，社会経済的地位および世代による偏りが存在することは否めない．これらの調査結果が，東北タイ全体のラオ人の認識を代表するものではないことはあらかじめ考慮しておかなければならない．

（3）調査結果と考察

調査結果のうち，表記体系と言語認識に関する以下の4項目について考察を行う．なお，これらの項目には，重複回答を許している．

（a）タイ語とイサン語で異なる言い回しの文章をタイ文字で書く

「いりませんか？いらない」という文章は，タイ語とイサン語で言い回しが異なる．この文章をタイ文字で書いた場合，タイのラオ人は，何語と

言語認識 / 実際の言語	タイ語	イサン語	ラオ語
タイ語・タイ文字 「いりませんか？いらない」	96%	15%	6%
イサン語・タイ文字 「いりませんか？いらない」	10%	95%	60%

認識するかを調査した．

その結果，タイ語の文章は，96%がタイ語，15%がイサン語と認識した．これに対し，イサン語の文章は，95%がイサン語，10%がタイ語と認識した．

これは，タイ文字で書かれた文章に対して，タイのラオ人は，ほぼ正確にタイ語とイサン語の識別を行っていることを意味している．

（b）タイ語とラオ語で同じ言い回しの文章をタイ文字とラオ文字で書く

「おめでとうございます」という文章は，タイ語とラオ語で言い回しが同じである．この文章をタイ文字とラオ文字で書いた場合，タイのラオ人は，何語と認識するかを調査した．

その結果，タイ文字の文章は，98%がタイ語，4%がラオ語と認識した．これに対し，ラオ文字の文章は，90%がラオ語，7%がタイ語と認識した．

言語認識 / 実際の言語	タイ語	イサン語	ラオ語
タイ語かつラオ語・タイ文字「おめでとうございます」	98%	17%	4%
タイ語かつラオ語・ラオ文字「おめでとうございます」	7%	11%	90%

これは，タイのラオ人が，タイ語かラオ語かを識別する場合，表記体系によってタイ語とラオ語の識別を行っていることを意味している．

（c）イサン語とラオ語で同じ言い回しの文章をタイ文字とラオ文字で書く

「いりませんか？いらない」という文章は，イサン語とラオ語で同じ言い回しである．この文章をタイ文字とラオ文字で書いた場合，タイのラオ人は，何語と認識するかを調査した．

その結果，タイ文字の文章は，95%がイサン語，60%がラオ語と認識した．これに対し，ラオ文字の文章は，94%がラオ語，15%がイサン語と認識した．

言語認識 / 実際の言語	タイ語	イサン語	ラオ語
イサン語・タイ文字「いりませんか？いらない」	10%	95%	60%
ラオ語・ラオ文字「いりませんか？いらない」	2%	15%	94%

これは，タイのラオ人が，ラオ語の文章をタイ文字とラオ文字で書いた場合，表記体系によってイサン語とラオ語の識別を行っていることを意味している．

（d）タイ語の挨拶とラオ語の挨拶をタイ文字で書く

「新年おめでとうございます」という新年の挨拶が，タイ語で新たに作られてから約70年が経過した[8]．このタイ語の新たに作られた挨拶と，ラオ語に昔からあった新年の挨拶を，タイ文字で書いた場合，タイのラオ人は何語と認識するかを調査した．

その結果，タイ語の挨拶は100%がタイ語と答えたのに対し，ラオ語の挨拶をイサン語と答えたのは52%にとどまった．これは，ラオ語に昔から

言語認識 / 実際の言語	タイ語	イサン語	ラオ語
タイ語・タイ文字「新年おめでとうございます」	100%	36%	9%
ラオ語・タイ文字「新年おめでとうございます」	29%	52%	40%

あった新年の挨拶よりも，タイ語の新年の挨拶の方が，タイのラオ人に，より浸透してきているからであると考えられる．

（4）調査に対する被験者の反応

今回の言語認識調査を行った際の被験者の反応で，最も多かったのは，質問票が，英語ではなくタイ語で記述されているので，気軽に回答できるというものであった．これまで，タイ以外の国から来た調査団の質問票は英語で記述されていることが多く，質問を理解するのに苦労することが多かったということである．

その一方で，タイ文字とラオ文字を並べて見たのは初めてであるという意見があった．また，同じ意味と推定される文章が，タイ文字とラオ文字で並べて書かれていると，まるでクイズを解くように，自分の理解できるタイ文字から，ラオ文字を読むことができたという意見もあった．これは，タイのラオ人の，ラオ文字に触れる機会の少なさを示している．これは，筆者が，コーンケン大学の図書館で，ラオ文字で記述された文献を丸１日費やして探しても，１冊しか見つけることができなかったことからも感じることであった．

しかし，その一方で，東北タイの家庭の中に，以前には見かけることのなかったラオス製の缶ビールがあるのを発見した．そして，そのラベルには，ラオ文字でラオ語が印刷されていた．東北タイの人々は，正確にそのラオ文字を読んでいるわけではないようであったが，外国産品のラベルの中で，ラオ文字に触れる機会が生まれつつあるというのは，新たな発見であった．

次に，調査地点による被験者の反応の違いについて述べる．

コーンケンにおいては，調査の目的と，調査結果の用途について，被験者から質問されることがあった．そして，そのような質問は，ラオ語を母語としない学生からの場合が多く，ラオ語を母語とする学生からは，比較的に少なかった．

一方，ナコンラチャシマにおいては，調査の目的と，調査結果の用途について質問されることはなかったが，コラート語を母語とする被験者の多くが，シャム語にきわめて近いコラート語を母語とすることに対して誇りを持っていることは強く感じた．

（5）言語認識調査に関する考察

すでに述べたように，タイ国内において，イサン語をラオ文字で表記した文書の出版を禁止するという政策が存在するため，タイのラオ人が，ラオ文字に触れる機会はほとんど存在しなかった．

それにもかかわらず，今回の調査により，タイのラオ人は，ラオ文字を見たときに，それがタイ文字と違うため，ラオ文字であると推定することはできていることが明らかになった．もちろん，例えば，ラオ文字の (Lao Letter O) とタイ語の (Thai Letter HO) が互いに似ているため，をHOと読んでしまうといった過ちは多く発生するものの，それ以降，注意を払いさえすれば，とを取り違える過ちは少なくなることも判明した．

このように，ラオ人に対し，母語であるラオ語を記述するための表記体系であるラオ文字の使用を禁止し，強制的にタイ文字の表記体系を導入したタイ政府の政策は，タイのラオ人から，ラオ文字の知識を失わせることに成功し，言語的にラオ人をタイ国民として同化する第一歩を踏み出したと考えることができる．

また，タイ語で新たに作られた新年の挨拶が，着実にタイのラオ人の間に定着してきている．ラオ語による挨拶は，ラオ人という民族への帰属意識を代表していると考えられるが，その挨拶が，タイ語による挨拶に置き換えられていくという事実は，タイのラオ人の民族への帰属意識が希薄化し，タイ国民への帰属意識が強まりつつあることを示している．

５．結論

本稿では，タイのラオ人を対象に実施した現地調査の結果，タイという国家体制に布置されたラオ人という民族について，ラオ人という民族への帰属意識に，ラオ人の母語であるラオ文字の使用を禁止したタイ政府の政策が影響を与え，タイのラオ人の，ラオ人という民族への帰属意識が希薄化していることが明らかになった．

そして，タイ政府による強制的なタイ文字表記

体系の導入は，単に言語的同化の一手段であるだけではなく，ラオ人に，タイ国民としての帰属意識を植付け，それを強化する手段となっていることも明らかになった．

ただし，今回は，タイのラオ人を対象に言語認識と文字体系の調査を実施し，ラオスのラオ人を対象にした調査は行うことができなかった．ラオスのラオ人に対して，同様の調査を行い，今回の調査結果と比較を行うことについては，将来の課題としたい．

また，本稿では，タイとラオスの経済格差，経済体制の相違が, 帰属意識に与える影響について，議論を行わなかった．これらについても，今後の検討課題としたい．

注記

(1) 1994年のラオスの人口である（二宮 1997: 206）.

(2) 1994年のタイの人口である（Thailand Development Research Institute 1998: 3）.

(3) パーリ語で東北を意味する.

(4) タイ・ラタナコーシン（Rattanakosin）王朝のラーマ（Rama）５世までの歴代国王は，華人を妻妾とするなど，華人指導者層との姻戚関係を深めてきた．また，華人は，米穀類の集荷・商品の流通，徴税の請負いなどを行い資産を築いてきた（市川1993: 220）．このように，華人はタイにおいて，政治的にも経済的にも重要な地位を占めてきた.

(5) ここでいうダイグロシアとは，ファーガソン（1959）のいうように，上位言語としての標準タイ語が公的な場で使われ，下位言語としてのイサン語その他の言語が私的な場で使われるという使い分けが成立しているということである.

(6) 3つの言語の違いは，以下の通りである．まず，言語学的分類上は，タイ語とラオ語という用語が存在する．タイ語もラオ語も，ともにタイ諸語の一つであり，独立した言語である．一方，イサン語は，もともとはタイ東北部のラオ人の母語であるラオ語の呼称を変更したものである．しかし，イサン語の元となったタイ東北部のラオ語は，ラオ語のパクセー方言に近く，ラオスの首都ヴィエンチャンで話されるラオ語のヴィエンチャン方言とは発音や言い回しが異なる．また，タイにおいては, 学校でタイ語を使った教育が行われている．そのため，イサン語はタイ語の影響を強く受けている.

(7) 山下（1996）は，タイのラオ人が，タイ語，イサン語，ラオ語についてどのような言語認識をしているかを調査する前提として，タイ国内におけるイサン語の言語学的な地位を明らかにし，また，1995年に，言語認識に関する予備調査を行った．今回作成した調査票は，この予備調査の結果を反映させたものである.

(8) タイ政府は，1931年に，英語のGood morning. Good afternoon. Good evening. Good bye.に相当する挨拶を，タイ語で新たに作成した．それが，現在でも頻繁に使用されるสวัสดี（サワッディー）である.「良き平安を」という意味のこの挨拶は, それまで, タイ語にもラオ語にも存在しなかった．この挨拶は，タイ国民としての帰属意識の強化に役立ってきたといえる.

参照文献

[1] 赤木　攻（1989），『タイの政治文化：剛と柔』，勁草書房.

[2] 青山利勝（1995），『ラオス：インドシナ緩衝国家の肖像』，中央公論社.

[3] Brown, J. Marvin (1995), *From Ancient Thai to Modern Dialects: And Other Writings on Historical Thai Linguistics*, Bangkok, White Lotus.

[4] Brown, David (1994), *The State and Ethnic Policies in Southeast Asia*, London, Routledge.

[5] Campbell, George L. (1991), *A Compendium of the World's Languages*, Vol.2, London, Routledge.

[6] ダッセ，マルシャル（福田　和子訳）（1976），『ゲリラは国境を越える』，田端書店.

[7] Ferguson, Charles A. (1959), Diglossia, *Word*, 15, 324–340.

[8] 福井捷朗（1988），『ドンデーン村：東北タイの農業生態』，創文社.

[9] 長谷川善彦（1981），『ラオス・ヴィエンチャン平野：自然・社会・経済』，アジア経済研究所.

[10] 林　行夫（1990），村落宗教の構造と変容，口羽益生編『ドンデン村の伝統構造とその変容』，創

文社，403–506.

[11] 林　行夫（1998），ラオの所在,『東南アジア研究』, 35(4), 78-109.

[12] 市川健二郎（1993），中国人，石井米雄・吉川利治編『タイの事典』，同朋舎出版，220–221.

[13] Jumsai, M. L. Manish (1971), *History of Laos: Second Edition*, Bangkok: Nai Pinyo Leowrung-o-lan.

[14] Keyes, Charles F. (1966), Ethnic Identity and Loyalty of Villagers in Northeastern Thailand, *Asian Survey*, 6, 362–369.

[15] 李　素玲（1997），タイの言語環境：タイの言語の多様性と標準語，小野沢純編『ASEANの言語と文化』，高文堂出版社，13–46.

[16] Moerman, Michael (1965), Ethnic Identification in a Complex Civilization: Who are the Lue?, *American Anthropologist*, 67, 1215–1230.

[17] 二宮道明編（1997），『データブックオブザワールド1997年版』，二宮書店.

[18] ปลีชา พิณทอง（プリーチャ ピントン）（1989），*สารานุกรม ภาษาอีสาน - ไทย - อังกฤษ* (イサン語－タイ語－英語辞書)，Ubol Thailand：Siritham Press.

[19] Smalley, William A. (1994), *Linguistic Diversity and National Unity: Language Ecology in Thailand*, Chicago & London, University of Chicago Press.

[20] 鈴木玲子（1998），ラオス語，東京外国語大学語学研究所編『世界の言語ガイドブック２：アジア・アフリカ地域』，374–387.

[21] Thailand Development Research Institute (1998), *Thailand Economic Information Kit*, Bangkok: Thailand Development Research Institute.

[22] 山下明博（1996），『東北タイにおける言語，地域，政治：紛争不在の事例研究』，広島大学大学院国際協力研究科修士論文.

[23] 山下明博（1999a），タイにおける「ラオ」の呼称とアイデンティティ，『国際協力研究誌』，5(1), 75–85.

[24] 山下明博（1999b），非タイ語のタイ文字表記による問題点，『安田女子大学紀要』，27，325–337.

[25] 吉川利治（1996），創られる歴史像：近現代に見るタイの国家意識，吉川利治編『東南アジア史に見る国家意識（重点総合研究「総合的地域研究」成果報告書シリーズ12号）』，1–27.

Abstract

Identities of Lao in Thailand and Laos

Akihiro YAMASHITA
Graduate School for International Development and Cooperation(IDEC),
Hiroshima University, Higashi-Hiroshima, 739–8529, Japan
E-mail: yamasita@yasuda-u.ac.jp

The Lao people range from the Kingdom of Thailand to the Lao People's Democratic Republic. Their mother tongue is the Lao language.

The Lao people is the dominant ethnic group in Laos. Therefore, Lao gains the status of national language in Laos by national policies. In other words, the Lao language is the predominant language in Laos.

On the other hand, the Lao people is under the control of the Thai ethnic group in Thailand. The Thai language gains the position of national language and the Lao language is only one of the regional languages in Thailand. In other words, the Lao language is the subordinate language in Thailand.

This study attempts to show that the status of an ethnic group and national policy have great influences on its identities and mother tongue by comparing the Laos in Thailand and Laos.

The Thai government decided on policies that the Lao people in Thailand should be called the Isan people and the Lao language should be called the Isan language. These policies have made the Lao people in Thailand weaken their ethnic identity and strengthen their national identity.

On the other hand, the Laotian government also decided on a policy that everyone who live in Laos should be called the Laotian. This policy has made the Laotian strengthen their national identity.